アジア・アフリカ地域研究 第 20-2 号　2021 年 3 月
Asian and African Area Studies, 20 (2): 288–305, 2021

フィールドワーク便り

殺し屋の儚（はかな）き運命

松　尾　隆之介 *

2019 年 10 月．気温は 40 度．日光が肌に痛いほど照りつける．汗が頬をゆっくりとしたたる中，砂煙を巻き上げ，私たちはある場所へと向かった．

調査地

舞台はアフリカ南部に位置する，ボツワナ共和国（図 1）．カラハリ砂漠が広がる砂の大地の中に，ひときわ大きな湿地帯が存在する．カラハリの宝石と呼ばれるその湿地帯は，「オカバンゴ・デルタ」．国際的に重要な湿地とされている［Jansen and Madzwamuse 2003: 143–144］．世界最大の内陸デルタといわれ，その豊富な水と豊かな生息環境を求めて多くの大型野生動物が生息している［Darkoh and Mbaiwa 2009: 161–162］（写真 1）．そのオカバンゴ・デルタのはずれ，とある枯れ川に，ある生き物の群れがいると聞き，急遽向かった．オカバンゴ・デルタの大部分（特に，年中水が存在している中心部を

図 1　ボツワナ共和国の地図
国境内の線は道路を示している．

写真 1　オカバンゴ・デルタ（保護区内）の様子
奥にアフリカゾウがいる．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 2　ため池に密集するカバの群れ

はじめとして）は保護区に指定されているが，向かった場所は保護区の外に位置している．枯れ川のすぐ隣には，村があり，現地の人々が暮らしている．現地での調査中，知り合った友人と行動を共にする中で，その友人にこの場所の情報を教えてもらった．今回がアフリカ初渡航になり，ボツワナでの人脈がないに等しい私にとっては，現地でできた友人は大切な相談相手であり，貴重な情報源にもなりうる．彼に車の運転を頼み，コンクリート舗装された日本とは，景色も運転のしやすさも全く異なる砂道を進み，現場へと向かった．現場に近づくにつれ，ため池が見えてきた．その中に，大きな岩のような物体が並んでいた．よく見ると，それらの岩はのそのそと動いていた．カバ（*Hippopotamus amphibius*）である．まるで大岩のようなグレーの巨体が，200 頭あまりも狭いため池の中にひしめき合っていたのだ（写真 2）．

オカバンゴ・デルタ

10 月のボツワナは乾季の終わりを迎え，1 年で最も水が少なくなる季節となる．雨季や乾季の初めには潤っていた場所も，すっかり水が無くなり，枯れ果ててしまう所も多い．しかし，オカバンゴ・デルタはそのような乾季にも水が存在し，この川でも去年まではこの時期に水は存在していたと，村人は語った．

オカバンゴ・デルタは，ボツワナの北に位置するアンゴラ西部と，ナミビア北部の高地から発したオカバンゴ川とその支流がカラハリ砂漠の砂の中に流れ込み，ほぼ 2 万 km^2 に達する湿地を作っている［富田 2007: 30–31］．しかし近年，これらの水の供給源となっているアンゴラでは，開発や人口増加が進み，その水の供給量が減りつつあり，そのためオカバンゴの周辺に位置するこの川の水はとうとう枯渇してしまったと推測できる．

カバの生態

カバは，アフリカでは 2 種の現生種で代表される．コビトカバ（*Hexaprotodon liberiensis*）は，アフリカ西部の森林と海岸平野に分布し，体重は 280 kg に達する．一方，カバは体重 3,000 kg にも達し，約 10 倍の差がある．サハラ砂漠以南ではよく知られる種であり，大きなグループを作ることもある．頑丈な下顎と分厚い首をもっている．交尾の権利のための競争の際，下顎による突きや前歯による切り付けなどで攻撃し，時にはかなり狂暴になる．あくびの間，顎は 100

度以上開く［富田 2007: 124–125］.

カバと人の関係

カバは本来，体をどっぷりと沈められるくらいの豊富な水を必要とする．カバの皮膚は紫外線に弱い．そのため，日中は直射日光を避けるために，その多くの時間を水中で暮らすのだ．眼窩（眼球を収めている頭蓋骨のくぼみ）は頭骨の中でも高い位置にあり，その体の特徴からカバが水生の環境と生活に適応していることが分かる［Coughlin and Fish 2009: 677–678］．体の大きさと，ほとんどの場合水中にいるその生活スタイルから，カバは捕食者に狙われることはほとんどない［富田 2007: 125–127］.

この川に生息するカバの群れは，水がなくなってしまうと本来の生息地を失って死滅してしまうかもしれない．そこで，地域の人々の活動によって，地下水をくみ上げ，このため池がカバのために作られた．そのため，この川にいるカバの群れはかろうじて存続しているのだ．人の活動が，巡りめぐって野生動物に影響を与える．そんな環境問題の一端を垣間見た気がした（写真 3）.

写真 3　ため池周辺のカバの死骸

カバは，日中は水中で暮らすことが多い反面，夜になると水中を出て，食料の草を求めて陸を徘徊する．その際，よく整った小道ができ，他の多くの動物にとっても簡単に水場に到達できる通路となっている．陸地に上がった時，人との近距離での接触があったなら，カバは人を襲うことがある．警戒心も強く，人が近づいてきてもそれを察知して襲うことがある．小さな船で近づこうものなら，大惨事を招きかねない［富田 2007: 125］．アフリカでは現地の人々から非常に危険視されている動物である．毎年，多くの人がカバに殺されているのである．見た目はぽっちゃりしていて，足も短く，普段はゆっくり歩いているため，あまり危険なイメージはもちにくいかもしれない．しかし，実は気性が荒く，走ると人間よりも早いため，本気で追いかけられた時には逃げ切ることは難しい.

私は学部時代，岐阜県の高山市でニホンカモシカを調査していた．ニホンカモシカは，過度の狩猟によって一時期個体数が激減した．そこで国は，ニホンカモシカを天然記念物に指定し，現在まで狩猟は厳しく規制管理され，保全されている．近年は個体数が徐々に回復している．そして奥山から人の生活圏付近まで生息域が広がり，地域では農作物を荒らされる「食害」が起きている［落合 2016: 208–221］．私が調査した高山市でも，農家の方から「カモシカに農作物を食べられた」と話を聞く機会があった．人の脅威では

ありながら，大規模な人為的影響で生存が脅かされ，地域レベルで守られ生きているカバ．そして，大規模に人為的に守られながらも地域レベルで被害を出しているカモシカ．アフリカと日本にまたがる人と動物の関係について，この2つの事例を対比させながら考えていた．

私は，このカバたちのもつ生態，境遇，そして人との関係について，今回のアフリカでの調査で感じ入るものがあり，カバを研究対象にしようと考えた．ボツワナは，「ツワナ」と呼ばれる民族が大部分を占める国で（少数民族としては，たとえば「サン（ブッシュマン）」と呼ばれる民族），このカバの群れを見た地点にある村は，ツワナの人々が生活している．彼らは，「カバは危険な動物」だと認識しているが，その中でカバとどのような距離感で同じ地域に共存しているのかは，非常に興味深いと感じた．

時にはそのような危険な「殺し屋」となるカバでも，こうして200頭あまりが入るには小さすぎるため池にひしめき合っているのを見ると，心がギュッと締め付けられる思いになる．もうすぐ雨季が来る．水が戻り，豊かな環境になるまで，是非とも耐えてほしいと，心の中で願い，その場をあとにした．

引　用　文　献

Coughlin, B. L. and F. E. Fish. 2009. Hippopotamus Underwater Locomotion: Reduced-gravity Movements for a Massive Mammal, *Journal of Mammalogy* 90(3): 675–679.

Darkoh, M. B. and J. E. Mbaiwa. 2009. Land-use and Resource Conflicts in the Okavango Delta, Botswana, *African Journal of Ecology* 47: 161–165.

Jansen, R. and M. Madzwamuse. 2003. The Okavango Delta Management Plan Project: The Need for Environmental Partnerships. In A. Turton *et al.* eds., *Transboundary Rivers, Sovereignty and Development: Hydropolitical Drivers in the Okavango River Basin*. Pretoria: African Water Issue Research Unit and Green Cross International, pp. 141–166.

落合啓二．2016.『ニホンカモシカ―行動と生態』東京大学出版会.

富田幸光．2007.『図説アフリカの哺乳類―その進化と古環境の変遷』丸善株式会社.